

## 松本通晴教授を偲ぶ

奈良女子大学 光吉利之

松本通晴君は、1994年10月10日の早朝、ついに65歳の人生を終えた。あまりにも早い死を前にして痛恨のきわみである。ほぼ1年間におよぶ永い闘病生活であったが、一度も弱気を見せせず、これからやりたい仕事のことなどを、周囲のものが気遣うほど意欲的に話してくれた。あの穏やかな人柄からは想像もできない強靭な意志には、頭が下がる思いがする。

松本君との出会いは、彼が同志社大学に就職したばかりの頃であったように思う。当時大阪大学におられた喜多野清一先生の研究会での出会いが最初であった。1950年半ば以来の付き合いということになる。この時以来、時には農村調査で行を共にし、時には酒を酌み交わすという機会に恵まれたが、私は、彼のいつも控え目で、他人に対してはこまやかな配慮を示し、慎重に行動するという人間としての優れた資質から、大きな影響を受け続けてきたように思う。大和、丹波、丹後、さらに信州などの農村調査の楽しい思い出など想いはつきない。あの微笑をたたえたにこやかな風貌とともに、いつまでも記憶から消え去ることははないだろう。

松本君の学問的な関心は一貫して農村研究に向けられていた。彼の農村履歴は永かった。最初の調査は、奈良県下で行われたJ. H. スチュワードの小農民調査への参加であったと聞いている。これよりしばらく後で、京都府下の農村にも入っている。この調査は、後に山国村や馬路村の同姓集団の研究や縦部市の株と株講の研究へと発展する。また彼はこれに平行して、郷里でもある瀬戸内村落へも頻繁に訪れている。ここでは最初に、蕪崎村の同族祭祀慣行や愛媛県東予地方における地主層の形成と展開の過程を取り上げたが、後には新居浜市における住友鉱工業を中心とする広大な地域社会の形成と、この地域にくり込まれた村落の社会構造の変化を追求している。これらの調査研究は、いずれも徹底的な史料の収集と聞き取り、緻密で周到な分析に裏付けられた膨大なモノグラフとして見事に結実した。

彼の問題関心は、終始戦後農村の変動過程の解明に向けられている。とりわけ彼は、近畿の村落に現存している株や株講、あるいは宮座の構造と変質過程に強いこだわりを持ち続けた。戦後の日本の村落が、多くの局面で急激に変動する中で、近畿の周辺村落ではこれらの結合が変質しながらも維持され、それが村落の社会構造を基礎づけているという事実へのこだわりがあった。彼はそこに村の「解体」ではなく、村の「存続」を見出したようだ。農村変動論の中に我が国の個性的な「伝統」をどのように位置づけるか、という困難な問題に真正面から肉迫し、そこに探求のメスを入れたといえよう。また近年の彼の関心は、村人たちの生活史や地方出身者がつくる都市の同郷団体へも向けられるようになった。学問的にも円熟期に達した彼の「人間」に対する深い共感の反映とも読み取れる。

松本君は学問研究のほかにも、日本社会学会をはじめとする諸学会で重要な役割を果した。とりわけ、「村落社会研究会」の古くからの会員として関西の研究者をまとめ、関西の農村研究の水準の向上に尽くされた功績はきわめて大きい。新しく学会として発足し、一層の発展が期待されている時期の死だけに、まことに無念としか表現しえないものがある。

謹んでご冥福を祈る。